

平成30年度

入学試験国語問題

注

- 解答はすべて解答用紙に記入すること。
- 問題用紙は持ち出さないこと。
- 字数制限のあるものは、原則として句読点、記号も一字に数えます（指示のあるものは除く）。

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昔の日本人は今の日本人とは違った歩き方をしていたという^①と、たいていの人は驚く。昔の日本人は、手足を互い違に出す今のよう^{*}な歩き方^②はしていなかった。右手右足を同時に出す、いわゆるナンバ^{*}のかたちで歩いていたのである。腰から上を大地に平行移動させるようにして、すり足^②で歩いてきた。いまでも、能や歌舞伎^{かぶき}、あるいは剣道などにはこの歩き方が残っている。

なぜこのような歩き方をしてきたかといえば、生産の基本が農業、それも水田稲作にあったからである。稲の生育を注意深く見守るためには、走ったり跳んだりすることは無用だった。事実、いまでも、浮き足立つとか跳ね上がるとかいう言葉は、日本語では悪い意味である。ところが、西洋のたとえばバレエでは、浮き足立つたり、跳ね上がったたりしないことには踊りにならない。バレエは、遊牧を生産の基本とする文明によって育^{はぐ}まれたのである。すり足ナンバでは、馬に乗って羊を追う仕事など、むろんできはしない。

(中略)

昔の日本人はと言ったのは、むろん、今の日本人は西洋人と同じ歩き方、同じ走り方をするようになってしまったからである。というより、いまや、世界中どこでも同じような歩き方、走り方をするようになってしまったのだ。産業革命以降、生産の基本が、農耕でも遊牧でもない、工業に移行してしまったからである。言ってしまうえば、産業革命は均質な商品だけではない、均質な身体をも大量に生み出したのである。学校、軍隊、工場は、そういう身体だけを必要としたのだ。(1)

こういうことを話すと、じつは日本人以上に、西洋人が驚く。それもかなり激しい驚き方をする。考えてみれば当然で、日本人の身体は、ここ一世紀のあいだに極端に変わった。わずか数世代のあいだに、1 型の身体から、2 型の身体へと急激に変わったのである。「一身にして二生^{にしよう}を^か経る」と言ったのは福沢諭吉^{ふくざく}だが、文字通りの一身に、洋の東西を^Aタイ現するようなものだ。むろん、西洋においても変化がなかったわけではない。が、遊牧型の身体から工業型の身体への移行はよりなだらかだったと言っている。日本人のほうが、はるかに変化に自覚的でありえたわけである。

けれど、その日本人にしても、変化をたんなる数値的なものとして受け取りがちである。食生活が変わり、畳の生活から椅子いすの生活へと移って、日本人の体型も西洋人なみになってきたというようである。実際は、身体のかたち以上に、その所作において激しい変化が起こっていたにもかかわらず、そういうことはなかなか気づかれない。昔の日本人は今の日本人とは違う歩き方をしていたと聞いて、たいていの日本人が驚くのがその良い例である。歩き方だけではない。笑い方も泣き方も、話し方も歌い方も、微妙に変化してきているのである。

今の日本人は昔の日本人以上に身振りが大きくなってきている。表情が明確になり、派手になってきている。おそらく、年配の方の多くがそう感じているだろう。昔はむやみに感情を表すのは下品とされたが、今ではまるで逆であるというように。

こういう述懐が端的に示すのは、身体所作の変化は個人の問題ではなく集団の問題だということである。たとえば両手を広げて肩をすくめたりする仕草は、昔はまったく見られなかったが、今ではよく見かける。肩で風を切って歩く女性にしてもそうだ。人は身体所作を、他人に対する、また自分自身に対するひとつの表現として、あたかも言語のように用いているのである。それは、習得され※でんば伝播する、ひとつの文化なのである。

とすれば、人は意識において考えるよりも先に、まず身体において考えていると言うべきだろう。ある身体所作の体系を採用したその段階において、人の身体は、意識よりも先にすでに考えはじめているのだ。少なくともある種の考え方、思考の流Bギを採用しているのである。そういえば、十九世紀の小説の名手たちは、登場人物を描くにあたって、何よりも、その顔かたちと身Bごなしを克明に描きだしていた。(2)

ここには、おもしろい問題が山積している。

身体の問題というと、人はまず自分の身体を眺める。手を見、腕を見、さらには我が身を鏡に映しだしてみる。つまり、身体というと、人はまず個人の身体を思い浮かべるのだ。そしてたいていは、どこかしら恥Bずかしくなつて、肩をすくめる。身体は個人に属するのであって、集団に属すわけではないというわけだ。

a

、ほんとうはそうではない。仕草や表情にしてもそうだが、

共同体の基盤は身体にあると言っているほどなのである。

日常生活の随所にその証拠がころがっている。たとえば、人はなぜスポーツを観戦するのか。勝敗の行方を見極めたいと思うからか。そうではない。人の身体の動きに同調してみたいのである。相撲で、ひとりの力士が土俵を割りそうになりながら残すとき、見るものと同じように反り身になって相手の回しを握り締めているのである。だからこそ、手に汗握るのだ。つまり、スポーツを見るものは、そのスポーツをいっしょに戦っているのである。野球にしてもそうだ。打球が決まった一瞬、b 指キ者^cに操られたように、会場の全体がどよめく。投手や打者の呼吸に、全観衆の呼吸が同調しているからである。それが人間の身体なのだ。

想像力といえば、意識の問題と考えられがちだが、そうではない。それはまず身体の問題なのだ。身体がまず他人の身体になりきるのである。その運動、その緊張、その痛みを分け持つてしまう。想像力の基盤は身体にあるとさえ言いたいほどである。(3)

模倣もまた身体の想像力のひとつと考えるといい。人は、歩き方、走り方、泳ぎ方を習うが、教科書によってではない。身体を介して習うのである。実際、子供は、教えるよりも先にまねている。身体⑥の想像力は、意識の想像力を上回る。稽古事けいこごとの経験者ならばだれでも思いあたるだろうが、言葉による注意は、身体⑥の想像力のきっかけにすぎない。

舞踊に関心を持つようになってはじめて、以上の事実に気づいた。人はなぜダンスを見るのか。何よりもまず身体そのものが、他人の身体と同調したいからなのだ。舞台を見ると、人は、ダンサーとともに踊っているのである。回転し、跳躍しているのである。だからこそ、見終えた後に、快い疲労を覚えるのだ。また、だからこそ、より美しく舞うもの、より華やかに踊るものにひかれるのである。スポーツにしても同じだ。人は、より強い、より速い、より美しいフォームにひかれる。身体⑦の想像力の限界を試そうとでもするように、人は舞台を見る。試合を見る。見ているのは目ではない。身体なのだ。(4)

そういえば、昔はよく、尊敬する人物の肖像や彫像を机上に飾ったものだ。なぜか。見ることが、全身的な行為であると信じられていたからである。3 の想像力以上に、4 の想像力が重要であることが、直観的に把握されていたからだ。人

物だけではない。たとえば雄大な光景は人を雄大にする。人は全身で見るのであり、⑧ 見た瞬間、何よりもまず身体がその光景に同調しようとするのだ。

このように考えると、なぜ舞踊と遊戯が神事として誕生したかが分かってくる。舞踊と遊戯、すなわちダンスとスポーツは、おそらくその起源をひとつにしている。いずれも、身体を介して、人間が集団を成していること、共同体を形づくっていることを確認する行為にほかならなかったのである。神前で舞うとき、共同体の成員もまたともに舞うのだ。相撲にしてもそうだ。観客もまた力を尽くして戦うのである。たとえば綱引きのような遊戯は、身体のような共同性をそのまま象徴していると言っている。しかも舞踊や遊戯は、身体を介して、人と人の共同性のみならず、人と自然の共同性をも教えたはずである。身体の想像力は、人と動物、人と自然の境界をも、やすやすと越えたはずだからだ。

近代になって、意識と身体はカク然と分けられた。同時に、五感とその領域も鋭く分カツされた。視覚の領域には美術が、聴覚の領域には音楽が配分された。そのいずれにもかかわる舞踊や演劇は、いささか曖昧な芸術としてさげすまれた。身体の領域はただ健康の問題、医学の問題へと差し回されたのである。c、ひたすら健康の技術にかかわるものとして、保健体育の思想が登場したのだ。(5)

だが、いまや近代の全体が問い直されているのである。美術も音楽も、いや文学さえもが、じつは全身的な感受の対象であることが明らかになりつつある。たとえば文体は、呼吸を通して全身にかかわるのである。芸術の鑑賞は、いまや身体の想像力を抜きに語ることではできない。いわんや舞台芸術の鑑賞、スポーツの観戦にいたっては、まさに身体の問題にほかならないのである。

『考える身体』三浦雅士

※ ナンバ：同じ側の手足が同時に出る歩き方。

伝播：伝わり広まること。

問一 次の一文を本文中の(1)～(5)のどの箇所に入れるのが適当ですか。番号で答えなさい。

思想はまずその身体に現れると直観していたに違いない。

問二 傍線部A～Eのカタカナを漢字で表記したとき、同じ漢字を使うものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A
タイ現

ア タイ将戦が始まる
イ タイ用年数が長い
ウ 人タイへの影響
エ タイ度を改める

B
流ギ

ア 言いなりになるギ理はない
イ ギ式が行われる
ウ 会ギが長引く
エ ギ牲フライを打つ

C
指キ

ア 力を発キする
イ キ馬戦の勝者
ウ 輸出のキ制を厳しくする
エ キ跡を信じる

D
カク然

ア 多くの資カクを持つ
イ 賞金をカク得する
ウ 農作物の収カク
エ 旅行を計カクする

E
分カツ

ア 話をカツ愛する
イ 全体を総カツする
ウ 物事を円カツに進める
エ 第一線でカツ躍する

問三 に入る適当な語を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア だが イ たといえば ウ そして エ したがって オ まるで

問四 傍線部①「今の日本人とは違った歩き方」とありますが、今の日本人の歩き方を解答欄に合うように本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

問五 傍線部②「すり足で歩いていた」理由を筆者はどのように考えていますか。本文中から二十二字で抜き出して答えなさい。

問六 に入る適当な語を本文中から抜き出して答えなさい。(ただし は四字、)

は二字とする。)

問七 傍線部③「変化」とありますが、日本人に起きた変化として適当でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生活様式 イ 身体的特徴 ウ 発言内容 エ 身体所作

問八 傍線部④「肩で風を切って」の意味と同じものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 幅を利かせる イ 手を振る ウ 顔が広い エ 腕に覚えがある

問九 傍線部⑤「人は意識において考えるよりも先に、まず身体において考えていると言うべきだろう」の理由となる一文を本文中から探し、その最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

問十 傍線部⑥「まねて」を言い換えている漢字二字の熟語を本文中から抜き出して答えなさい。

問十一 傍線部⑦「人は舞台を見る。試合を見る。」の理由を本文中から二十一字で抜き出して答えなさい。

問十二 傍線部⑧「見た瞬間、何よりもまず身体がその光景に同調しようとする」と同じ内容で言い換えている連続する二文を本文中から十八字で抜き出して答えなさい。

問十三 筆者の考えと合致するものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 昔の日本人の歩き方は、能や歌舞伎、武道から影響を受けている。

イ 人がスポーツ観戦をするのは、勝敗を大事にしたいという気持ちからである。

ウ 舞踊や遊戯によって、人は自然との共同性について学ぶことができる。

エ 視覚・聴覚の二つの領域にかかわる舞踊や演劇は、優れた芸術としてみなされるべきだ。

【二】 次の古文を読んで、後の問いに答えなさい。

相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるる事ありけるに、すすけたる明り障子のやぶればかりを、禪尼手づから、小刀して切りまはしつづ張られければ、兄の城介義景、その日のけいめいして候ひけるが、「給はりて、なにがし男に張らせ候はん。さやうの事に心得たる者に候ふ」と申されければ、「その男、尼が細工によもまさり侍らじ」とて、なほ一間つづ張られけるを、義景、「皆を張りかへ候はんは、はるかにたやすく候ふべし、まだらに候ふも見苦しくや」とかさねて申されければ、「尼も、後はさはさと張りかへんと思へども、今日ばかりは、わざとかくてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ゐる事ぞと、若き人に見ならはせて、心づけんためなり」と申されける、いと（ ）けり。

〔徒然草 第百八十四段〕

※ 相模守時頼…五代執権北条時頼。

松下禪尼…北条経時・時頼の母。

城介義景…安達義景。「城介」は秋田城の介。

けいめい…客を接待して立ち働くこと。

さはさはと…さっぱりと。

問一 傍線部A～Dの古語をすべてひらがなで現代仮名遣いに改めなさい。

問二 傍線部①「張られけれ」、③「申されけれ」の主語を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 相模守時頼 イ 松下禪尼 ウ 城介義景 エ なにがし男 オ 作者

問三 傍線部②「その男、尼が細工によもまさり侍らじ」の解釈として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア その男は尼が手仕事をするよりもきつと上手にできるでしょう。
- イ その男に尼が手仕事を教えても決して上達しないことでしょう。
- ウ その男が尼よりも早く手仕事を終えるということはございません。
- エ その男が尼よりも手仕事がうまいということはまさかないでしょう。
- オ その男は尼がこの手仕事を終えるまでは待つていないでしょう。

問四 傍線部④「今日ばかりは、わざとかくてあるべきなり」について、次の設問に答えなさい。

- 1、「かくてあるべき」とありますがどのようなようにしていますか。本文中より十字以内で抜き出して答えなさい。
- 2、わざとこのようにした理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
 - ア 丁寧な作業によって誠意を伝えるため。
 - イ 自分で行動する大切さを学ばせるため。
 - ウ 俟約を心がけるようにさせるため。
 - エ 豪華に見せて権威を示すため。
 - オ 協調性を身につけさせるため。

問五 傍線部⑤「若き人」とは誰を指しますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 相模守時頼
- イ 松下禅尼
- ウ 城介義景
- エ なにかし男
- オ 作者

問六 () に入る語として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア あやしかり イ うつくしかり ウ ありがたかり エ 口惜しかり オ わびしかり

問七 この作品(徒然草)と同時代に成立した作品を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 源氏物語 イ 方丈記 ウ 枕草子 エ 土佐日記 オ 奥の細道

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「花」は世界中のいたるところで咲きほこり、人々はその「花」を庭や部屋に飾り、目や鼻で楽しんでいる。日本人も世界各国の人々と同様に、「花」をこよなく愛しており、美しいものを表現するときや褒め言葉として「花」を多く用いている。^①「高嶺の花」、「百花繚乱」、^②「花も実もある」などがその例である。

さらに日本人は、気候を表すときにも「花」を用いることがある。日本人が特に愛でていた桜が咲く頃の曇り空のことを「花曇り」という。曇り空にもかかわらず「花曇り」と言うだけで、気持ちが少し晴れやかになる。昔の人も、「花曇り」と言うことで、曇った気持ちを紛らわそうとしたのではないだろうか。

このように、「花」は沈んだ気持ちを明るくしてくれる。そして人は、その「花」に対して自分の気持ちや状況を重ね合わせては、歌を作ってきた。その営みは古来から現代にいたるまでずっと続いている。江戸時代の俳人と謝蕪村は菜の花が広がる景色を見て、次のような俳句を詠んでいる。

^③ 菜の花や月は東に日は西に

日が西に傾こうとしている夕暮れに、菜の花は明るい黄色を広げており、東を振り返ると、空には月が見えており、その美しい景色に感動した際に作られたものである。与謝蕪村の俳句には、この他にも菜の花から作ったものが多くあり、春の情景を巧みにそして色鮮やかに表現している。^④このように、人は「花」を愛し、「花」に思いを重ねてきた。四季折々、さまざまな花が私たちの心を明るく照らしてくれる。あなたも「花」に自分の思いを込めて歌を作ってみてはどうだろうか。

問一 傍線部①「褒め言葉」とありますが、人や物を褒めるときに使うことわざを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 怪我の功名

イ 卵に目鼻

ウ 親の光は七光り

エ 月夜に提灯^{ちつようちん}

問二 傍線部②「百花繚乱」のように数字を用いた四字熟語は多くあります。次の四字熟語の空欄に入る適切な漢数字を答えなさい。

- ア 首尾 貫 イ 里霧中 ウ 三寒 温 エ 千変 化

問三 傍線部③「菜の花」は季節を示す語です。次の傍線部の語が示す季節をそれぞれ漢字で答えなさい。

- ア 山吹こぶなや小鮒こぶな入れたる桶に散る 正岡子規
イ わが門へ来さうにしたり配り餅 小林一茶
ウ 恋するや遠き国をば思へるやこのたそがれの睡蓮かいらんの花 与謝野晶子
エ 青玉のしだれ花火はなびのちりかかり消ゆる途上を君よいそがむ 北原白秋

問四 傍線部④「色鮮やかに」とありますが、日本の慣用表現・ことわざには色を用いたものが多くあります。次の空欄に入る適切な色を漢字で答えなさい。

- ア 菜に塩 イ 頭の いねずみ ウ い目で見られる エ 人の花は い